

タタキ甕

菊池 健一

1 はじめに

筆者は今を去る47年前、学生時代に、柏市の戸張一番割遺跡の調査に参加し、当時ではほとんど類例がなかったタタキ甕に出会い、衝撃を受けた。

恩師大塚初重先生の教えに従い、各地を実見調査し、今から43年前の1982年に、明治大学大学院に修士論文として提出した。1982年の修士論文の成果は1990年、同人誌「史館」第22号に纏めなおして発表（菊池1990）、その後、野田市史、柏市史、佐倉市史に関わらせて頂き、各地の先輩、同志の方々にお世話になりながら、成果をまとめてきた経緯がある。

2021年には、「佐倉市史研究」第34号で「佐倉の古墳出現期について－大崎台遺跡の分析（中）叩き甕から－」と題して小稿を草した（菊池2021）。この稿の内容は佐倉市大崎台遺跡のタタキ甕の悉皆調査を初め、関西では大阪府豊中市の服部遺跡・穂積遺跡・服部西町蛭池西遺跡・利倉西遺跡・庄内幸町庄内遺跡や奈良県桜井市の纏向遺跡、東海地方では愛知県豊田市の伊保遺跡・高橋遺跡、関東圏では千葉県富津市打越遺跡・植ノ台遺跡・佐倉市大崎台遺跡出土のタタキ甕について、調査地域を広げ、各地の教育委員会や研究者の方々にお世話になりながら資料調査したものを纏めた。

上記の佐倉市史研究第34号を纏める中で、佐倉市大崎台遺跡出土のタタキ甕の外側のタタキ痕に対応するように土器の内面にハケ目等の調整痕跡の他に、甕の器面に微妙な凹凸を観察する事が出来た。この凹凸が生じるのは何故かと考えるとタタキ（Paddle）に対する当て具の痕跡（Anvil）と理解するに至った。

その後、福岡大学の武末純一教授から「タタキ甕を調査される際には、外側のタタキ面と内面の当て具痕跡との対応を、是非とも押さえること。タタキ目よりもタタキ面の把握が重要であることを、広く周知して頂ければ幸いです。」とのコメントを頂いた。このコメントを解釈すると武末氏も土器内面に認められる凹凸を当て具の痕跡と考えておられることになる。資料調査にあたり、筆者は武末先生から頂いた課題を解決

する方法として、拓本は器面の表面を採拓するのが通常であるが、器の表面に対応する位置で器内面も、併せて採拓する事とした。

また、同じく武末先生からは2025年10月9日に筆者自身の研究調査の為に九州へ旅行した際に「外面に施されるタタキ痕跡だけの観察ではなく、内面の当て具痕を含めた観察が必要となる。つまり点ではなく、面として考えることが必要」と、再度ご教授頂いた（武末2013、2016、2019）。

2 本論

当該論文では、佐倉市史研究発表以来4年の歳月が経つなかで、実施してきた資料調査を加味し、古墳時代開始期において、千葉に関西圏からの移住集団が存在した可能性が高いこと、少なくともタタキ甕が流入し、その技法が伝播していた事を考えてみたい。

2.1 タタキ甕製作に関する研究史

土器の製作に関する研究は佐原真氏の研究以来多くあるが、ここでは畿内第五様式～庄内式にかけて考察した都出氏（都出1974）、それに続く米田氏（米田文孝1982）を紹介する。

都出氏は「畿内第五様式の土器づくりを規定した基本原理を考えておこう。原理を発見すれば、技法変化の法則もつかみやすいからである。」として、畿内第五様式土器を特色づける製作技法の第一はタタキ技法、第二は底部輪台技法、第三は分割成形技法にあると言う。

先ず、タタキ技法は「巻き上げた粘土紐の接合部外面を消しつつタタキ締める工程で使用される」とし、次いで底部輪台技法は「直径2～3cmの小さなドーナツ状の輪台をつくり、輪の内面は充填しないまま、これを基礎に粘土紐を巻き上げ、鉢形の逆円錐台をつくる。この広い口から手を差し入れて内部を支えながら右手のタタキ板で外面を叩いて（内面に当て具を添えて：筆者注）粘土紐の継ぎ目を消す、この際にいまだ充填されていない輪台の孔が指支えに有効である

う。この作業の後、輪台の孔に粘土を充填するか、内壁の粘土を指で伸ばして埋める。逆円錐台の底部をつくる過程を成形第一段」と言う。更に、分割成形技法は「粘土紐の巻き上げを重ねて、その都度、タタキを施し、体部上半までの成形を行うA類と、上半と下半を別づくりし、結合させて結合部にタタキ技法を行うB類がある」と言う。

A類とされる底部から胴部上半までタタキを連続させるのは庄内甕の技法、B類とされる胴部下半と胴部上半を結合させるのは第五様式から伝統的第五様式とされる時期まで継承される技法で、管見の及ぶ範囲では関東のタタキ甕では多くのものがB類で、A類と考えられるものは、今回報告する蓮華寺遺跡出土例や前回報告した植ノ台遺跡例（菊池2010）の他には神奈川県鴨居上ノ台109号住居跡、千葉県柏市戸張大六天遺跡第49号住居跡等があるが、庄内期の大和東南部に特徴的な甕である（菊池2021）。

「成形第一段階でタタキ甕の逆円錐台の上に、2～4巻きほど巻き上げ、外面に逆台形の輪を重ね、成形第一段階との接合面を含めて、外面にタタキを施し、それが半乾燥した時点で…輪積み作業を繰り返す」と言われている。輪積み成形された胴部のタタキの方向を何度も変えることなくできるだけ連続させて、一気にたたき上げる連続ラセン技法は千葉県では戸張一番割遺跡出土例に見る事ができる¹⁾。更に都出氏は「当初、成形技法として出発したタタキは、(盛期には)装飾的な効果を持たせようとしているかのようである」と言われている。

別稿で触れるが庄内甕に現れる矢羽根タタキは、装飾的な効果と理解できる。更にタタキ技法で成形される範囲は頸部と口縁部の境まで及び、口縁部をもタタキ出している。これを都出氏は「口縁部タタキ出し技法」と述べている（都出1974 前出）。

次いで米田文孝氏は、弥生後期型甕、庄内型甕、布留型甕の製作技法の変遷を捉える中で、製作工具にはタタキ板、ハケ原体と布、皮があり、庄内型甕以降には胴部内面を削り出す為の鉋（ヤリガンナ）が加わると言う（米田文孝1982）。更にタタキ技法がPaddle and Anvilであるならば佐倉市大崎台遺跡で確認されたタタキ（Paddle）に対する当て具（Anvil）が加えられるはずであると、筆者は考える。

そこで、筆者はタタキ土器製作に際して使用されたと考えられる工具の内、当て具とハケ原体の出土例があるかについて、東京国立博物館収蔵資料を調査して

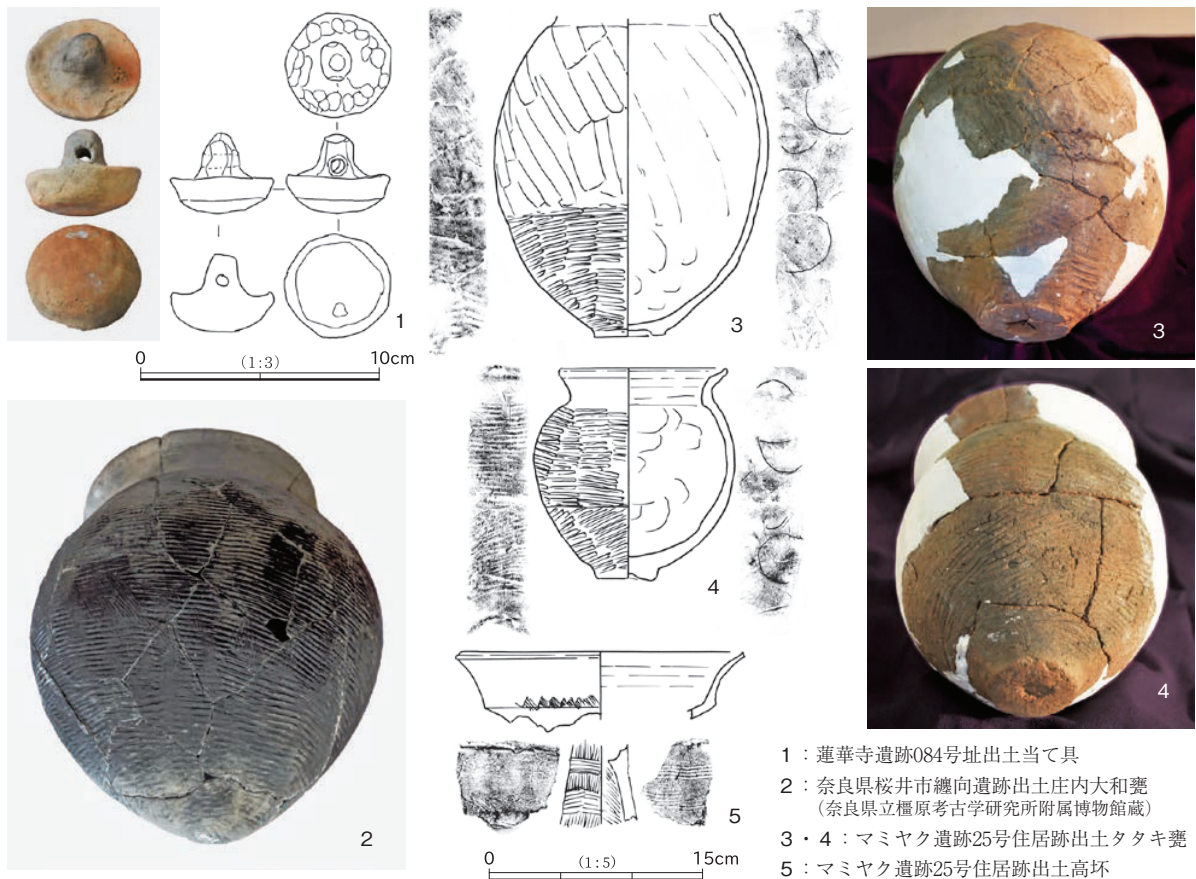
みると、福岡市の宮ノ前遺跡からタタキ具・当て具が出土していることを確認した。宮ノ前遺跡をヒントとして、九州での類例について、福岡市埋蔵文化財センターに問い合わせたところ、福岡市では宮ノ前遺跡の他にも古墳時代後期～飛鳥時代初期に九大筑紫キャンパス内遺跡の内、春日市と大野城市境の「御供田遺跡」で、木製当て具が出土しているとの回答を得た。また、ハケメ（須恵器だとカキメ）原体は先の元岡・桑原遺跡群18次調査や、弥生時代前期の比恵25次調査で出土している事を教示された。更に、久住猛雄氏からは福岡市内では未報告だが、福岡市の雀居遺跡7次調査のSE04（4号井戸）下層から、大型土器製作用と考えられる古墳前期の木製当て具が出土しているとの回答を得た。

これらの資料を元に、白井克也氏（白井1996）が論考している²⁾。当て具については亀田氏が全国規模で資料収集し、論考を加えている（亀田修一2020）。亀田氏は、「当て具はキノコ型で土製・木製のものがあり、陶製・土製の当て具は朝鮮半島にも見られ、作ろうとする壺や甕類の大きさや形等に応じて当て具が使い分けられていることが推測できる。当て具には土製・木製のキノコ型の当て具の他に、円礫や土製の球形のものも使用されていたと推測される」と言われる³⁾。氏が収集した資料には古墳時代前期の例として千葉県蓮華寺遺跡例が取り上げられており、「4世紀代のものとして有文当て具を含めても東日本唯一の例である。小型壺や細頸壺等の蓋の可能性もあるのであろうか」と評価される（亀田2020 前出、p301、p305、p316）。

2.2 蓮華寺遺跡084号址出土の土製当て具について

前述したように蓮華寺遺跡では古墳時代前期の東日本では唯一とされる畿内V様式系や庄内式甕のタタキ成形の際に用いられたと考えられる土製当て具が出土している（亀田修一2020）。そこで筆者、甲斐氏の見解を確認する為に、令和7年5月25日に木更津市の許可を受け、同市郷土博物館金のすずの箕島正広氏にお世話になりながら、資料を調査したのでここに紹介したい。

蓮華寺遺跡は木更津市の中央やや南西に位置し、東京湾に注ぎ込む小河川の一つである矢那川中流域の左岸丘陵上に位置する。これまで1988年から3次にわたり調査が行われ、この結果、蓮華寺遺跡は、古墳時代



- 1：蓮華寺遺跡084号址出土当て具
- 2：奈良県桜井市纏向遺跡出土庄内大和甕
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵)
- 3・4：マミヤク遺跡25号住居跡出土タタキ甕
- 5：マミヤク遺跡25号住居跡出土高坏

図・写真1 関連資料(1)

前期を中心とした集落と考えられている（野口行雄1988、松本勝1994、山形美智子1997、甲斐博幸2006）。

当て具は1997年に報告された084号址より発見された。出土状態は床面より若干浮いた状態で出土している。報告書によると、当て具が出土したのは南側第3ピットの外側、ベッド状遺構上で、報告書では覆土中と報告されている。ベッド状遺構の上に置かれていた可能性がある。尚、篠島氏によると弥生時代後期から古墳時代前期の君津郡内にあって、このベッド状遺構はあまり類例を見ないとのことである。

当て具はキノコ形で、重さは140gである。実測時の感覚では丁度、掌に乗せると持ちやすさを感じる。握り部には径1.2cmの穿孔が認められる。甲斐氏によると指ないし棒状のものを差し込んで使用するとされるが、筆者の観察では、使用により擦れた痕跡は認められないが、紐を通して使用したのものと思われる。類例は福岡県福岡市雀居遺跡第7次調査の際に検出された井戸内から発見されている（村松道博他2000）。先に触れた亀田氏（亀田2020 前出）の論考によると、当て具で握り部に穿孔の認められる例は、関東地方で須恵器の生産が開始されて以降、9世紀の埼玉県入間

市新久窯跡や、同じく9世紀の同市前内出窯跡、7世紀後半の滋賀県大津市山ノ神遺跡にも認められると言われるが、古墳時代前期の例はないと述べる。

アタリ部の直径は6cmで、外周部には指で押さえた痕跡が残る、この指オサエの痕跡を観察すると、当て具を時計回りに回転させながら指で押さえて整形したものと理解できる。器面に残る指の幅はほぼ1cmなので、製作者の指はかなり細かった感じを受ける為、もしかすると製作者は女性の可能性を思わせる。アタリ部は撫でられており、握り部は粘土を継ぎ足している痕跡が認められる。胎土は細かく、所々に石英・海綿状骨針が認められる。胎土から見ると千葉県内で製作された可能性が高いと判断する。色調はアタリ部が10YR6/8橙色、握り部は7.5YR3/2黒褐色である。尚、千葉県内の弥生時代後期から古墳時代前期の土器には亀田氏が指摘するような蓋に相当する例はなく、従って本例を蓋とは考え難い。こう考えると、本資料をタタキ製作の際に内面に当てた当て具と考えるのが自然であろうと思う。筆者も甲斐氏の意見に同意する。次いで出土遺物から本資料の帰属時期を考えたい。

当て具が出土した蓮華寺遺跡084号址からは、他に



1 富津市植ノ台遺跡出土のタタキ甕



(同左頸部拡大)



2 木更津市蓮華寺遺跡出土のタタキ甕



写真2 関連資料(2)

口縁部にS字状の結節文がある壺口縁部片や、廻間2式段階以降の東海西部系高坏等が出土している。共伴遺物から小沢洋氏、加藤修司氏の地域編年を参考に帰属時期を考えると、古墳時代前期1期（前期初頭～前葉）に位置づけられる（小沢洋・加藤修司2024）。この他にも現在当て具と考えられる資料は、まだ未実見であるが、植ノ台遺跡の遺物包含層中に用途不明土製品と報告されている土製品が、形態的に当て具の可能性はある（小沢・戸倉1991）。

筆者は、タタキ土器製作で使用されたと考えられる当て具があるならば、タタキ甕製作を常道とする畿内系の集団が当地域に移住した可能性が高いと考え、木更津市内で出土したタタキ甕を調べた所、蓮華寺遺跡（山形美知子1997 p.25、本論写真2-2）とマミヤク遺跡（小沢洋他1989）から出土している事を確認したので、資料調査を実施した。

資料調査は令和7年7月10日に木更津市の許可を受け、同市収蔵庫で酒巻忠史氏にお世話になりながら実施した。調査した資料は蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕とマミヤク遺跡25・89号住居址出土のタタキ甕である。

実見調査した資料の内、蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕は、2021年に筆者が『佐倉市史研究』で報告した千葉県富津市の植ノ台遺跡出土のタタキ甕（小沢洋1991）に近い特徴を持つので両資料を比較検討してみたい。

まず、植ノ台遺跡包含層中から出土したタタキ甕（写真2-1）は、色調が浅黄色で、胎土は1mm大の細かい小砂粒が多く。石英、角閃石、雲母を僅かに含み、焼成は良好で光沢感を持つ、口縁部はわずかに屈曲しながら外方に直線的に伸び、端部は2～3mm幅につまみあげられている。口縁部整形は外面頸部から口縁にかけてのタテ及びナナメ方向ハケが施される。

更に、ハケ整形の下の一部には、畿内の庄内甕の特徴となる口縁部タタキ出し技法の痕跡が認められる。土器整形の特徴には、胴部外面に、右上り3/cmのラセン状のタタキが認められる。胴部下半欠損部付近に右上がりハケ整形らしきものが認められる。胴部内面下半は下から上に、上半は左から右にヘラ削りがされている。胴部下半は欠損によって不明だが、尖り底の可能性のある事から筆者は庄内大和甕と考えた。

ここで蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕の特徴

を説明する為に『佐倉市史研究』で掲載した青木氏の文章を以下に引用する。「外面に施された連続ラセンタタキと内面の明瞭なヘラ削り痕跡に加え、口縁部形状等の特徴から、植ノ台遺跡包含層中出土のタタキ甕は『庄内系甕』と判断すべきものである。形態的には胴部球形化が進み庄内型甕の型式組列中で新相を呈する、やや小型の甕である。こうした外形からは畿内の大和型庄内甕の新相に相似形態を見ることができ、大和型庄内甕の新相（纏向3式～4式：庄内式期末～布留式期初頭）に見られる小型の庄内型甕と法量的にも近似するが、成形技法・製作手法・胎土からみると純粋な『庄内系甕』、畿内中枢圏からの直接的な搬入土器と見るには違和感がある」と述べられた。

更に青木氏は「胴部外面、頸部から口縁部にかけてのハケ整形への違和感は、外面のタタキが右上がり、左上がりあるいは水平方向のタタキが大半である大和型庄内甕（ごく稀に右上がりも存在するが：筆者注）の属性からは逸脱している」という。

また、「胴部内面削りが頸部のやや下方から施される点が庄内大和型甕の特徴と共通するとされる。色調や胎土では大和東南部産大和型庄内甕と色調や胎土が酷似するものの、奈良盆地各地の新相を示す大和型庄内甕では同様な色調・胎土によるものは極めて少なく、当該土器の特異性が窺える」といい、「観察から本資料を庄内大和型甕新相段階の形態や庄内型甕の製作技法を忠実に模倣し、大和型庄内甕の影響下に製作された『庄内系甕』との判断をせざるを得ない」との教示を頂き『佐倉市史研究』に報告した。

そこで筆者が、蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕(写真2-2)を観察すると、色調は10YR2/3黒褐色で、胎土は1mm大の細かい小砂粒が多く、細かい。胎土には石英・角閃石・雲母を僅かに含み、焼成は良好で光沢感を持つ。残念ながら口縁部は大きく欠損するが、残った部分をみる限り、口縁部整形は外面頸部から口縁部にかけてヨコナデで調整され、植ノ台遺跡包含層中に見られたハケ整形、更に、ハケの下の口縁部タタキ出し技法は認められない。土器整形の際の、胴部外面のタタキは植ノ台遺跡包含層出土のタタキ甕には、右上り3/cmのラセン状のタタキが認められる。

これに対し、蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕ではやや左上がりである。胴部下半欠損部付近に左上がりのハケ整形が認められる。但し、胴部内面下半は下から上に、上半は左から右にヘラ削りがされている点では、両者共通している。

蓮華寺遺跡1号住居址出土のタタキ甕の帰属時期は、植ノ台遺跡包含層中から出土した大和型庄内甕と、ほぼ同時期で大和型庄内甕の搬入品と位置づけられる。

しかし、厳密な意味で大和型庄内甕と比較すると、整形の上で多少の相違が観察されており、更なる分析が必要となり将来の課題として残る。

ついで資料調査したマミヤク遺跡25号住居跡について簡単に触れてみたい。住居跡の形は壁際に壁柱穴をもち、共伴遺物には口縁部に斜格子沈線（浮線網目状文か？）を持つ弥生系の壺があり⁴⁾、覆土中からは坏部と脚部に4条1単位の櫛描文が見られる高坏が出土している⁵⁾、この他にガラス小玉、穿孔のある鉄製品が出土している。

マミヤク遺跡の出土品では25号住居跡出土のタタキ甕(図・写真1-3・4)を資料調査することが出来た。これらは、底部に輪台技法が見られること、タタキ条線は4～5条の粗いタタキであることを根拠に伝統的第V様式の系列にあると理解できるが、胎土には当地域の他の土器と共通する赤色スコリア等を含み、特に3の土器の胴部上半には器面を整えるためにケズリ技法が適用され、関西圏の庄内甕にあつては器面を薄くする為に内面に施されるケズリ技法で外面を削る事は考えられない。従って、土器作りの作法は共通するが在地で変容したものと考えられる。

本遺跡では他にも44・89号住居跡でタタキ甕、及び鉢が出土しており、44号住居跡から出土した鉢は千葉県内では神門4号墳墳丘下等にも出土例がある。この他にも木更津市周辺では袖ヶ浦市金井崎遺跡141号住居跡・木更津市南谷遺跡003号住居跡・同市俵谷遺跡でもタタキ甕が出土している。今回は木更津市を中心とした君津郡内のタタキ甕に関連する資料を取り上げたが、千葉県内で現在管見の及ぶ範囲では、東葛地区の戸張一番割遺跡を中心とした地区、印旛郡内では大崎台遺跡を中心とした地区、上総では国分寺台遺跡群でタタキ甕が点在するのが確認されている。

3 まとめ

今回は、主に上総地区で発見されたタタキ土器及びその製作具（製陶具）を現地調査し、それらの分析から、土器の移動の背景には集団の移動・移住・移住地での適応の結果であろうと考える⁶⁾。

ここまで述べてきた事から古墳時代前期の初め、奈良県東南部に起源を持つ土器を使う集団が、東海西

部、東海東部の各地を経由して千葉県に入植し、入植地で当初は故地のルールに基づいての土器製作を行おうと試みたが、土器製作の上で環境適応する内に、模倣が行われ、更にマミヤク遺跡25号住居跡で出土したタタキ甕には胴部外面に、器壁内面の成形として使用されるべきケズリ技法が施される土器製作技法の崩れが生じたと考えられる。(2025年12月29日脱稿)

謝辞

本稿を草するにあたり、資料調査や文献調査等にあたって以下の関係機関及び各氏に大変お世話になりました。

木更津市教育委員会、木更津市郷土博物館金のすず、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、八千代市立郷土博物館、八千代市立郷土博物館土器作り同好会

植木武、久住猛雄、鈴木敏則、鈴木とよ江、酒巻忠史、武末純一、常松茂人、平井流史、松川由次、箕島正広、吉田赴、渡辺修一(敬称略)

特に武末純一先生は九州での調査研究の際、地下鉄福岡空港駅までお迎えに来て下さり、福岡市立博物館を案内してくださいました。元共立大学の植木武先生には本稿提出前に査読していただきました。また、図版作成及び文章校正の際には渡辺修一氏に大変お世話になりました。

以上、記して感謝申し上げます。

注

- 1 柏市戸張一番割遺跡10・11号住居跡から出土したタタキ甕は、北鳥池式のタタキ甕に通じる連続ラセン技法と考えられる。
- 2 参考とした白井氏の論考の入手や、タタキ具の類例については、久住猛雄氏にお願いし、2025年5月6日に資料をお送り頂いた。
- 3 当て具については、2025年5月11日に八千代市立博物館で白井氏論考中のFig.6-13の愛媛県玉川町八幡遺跡出土の当て具を基に、製作実験を行った。その結果、出土した当て具に大・中・小あり、土器の製作過程によって造り分けた可能性がある。タタキ土器の製作中に気付いたのは、土器製作者が右利きなら当て具は左手に持ち、右手にタタキ板を持ったと考えられる。この場合、当て具は土器を膝に抱えた際に、握りやすい大きさに製作されたものと考えられ、口縁部径は当て具を入れたら動きやすい大きさが必要であり、中心がくり抜かれているのは、握り部分の中心を削り抜く事によって重量を軽くした可能性も考えられる。両手を使う作業なので当て具はなるだけ軽い必要があり、土製品の代替品として軽い石・木・手のひらが使われたと考えられる。
- 4 壺の口縁部に浮線網目状文を施文する技法は、野田市三ツ堀遺跡等弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけて見ら

れ、小橋氏による中台2-1と考えられる(小橋2025)。

- 5 2025年10月下旬、新潟で開かれた日本考古学協会秋期大会の折、三河の鈴木とよ江氏にお聞きした所、「高坏の坏部・脚部に櫛描き文を描くという特徴は、東海西部、朝日遺跡を中心とした濃尾平野を中心とした弥生時代後期欠山式から古墳時代前期廻間式にみられ、三河には珍しい」とご教示頂いた。
- 6 土器移動の研究は、遠隔地の土器編年との並行関係をクロスチェックし、人の移動実態を歴史的に位置し、流通する背景や集団の交流関係を考えていくと言う方法がとらえられる(鈴木敏則2025)。本資料は鈴木氏から郵送頂いた。

参考文献

- 小沢洋他1989「小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡」財団法人君津都市文化財センター
- 小沢洋・戸倉茂行1991「植ノ台遺跡」財団法人君津都市文化財センター 17図
- 小沢洋・加藤修司2024「西上総における弥生時代～古墳時代前期の土器編年」『木更津市史研究』第7号
- 甲斐博幸2006「蓮華寺遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2』
- 山形美知子1997「木更津市蓮華寺遺跡Ⅲ」財団法人 君津都市文化財センター
- 亀田修一2020「無文当て具に関する覚書」『福岡大学考古学論集 3-武末純一先生退職記念-』
- 菊池健一1990「一つの甕から-弥生時代後期終末から古墳時代はじめにかけての叩き甕について」『史館』第22号
- 菊池健一2021「佐倉の古墳出現期について-大崎台遺跡の分析(中)叩き甕から-」『佐倉市史研究』第34号
- 小橋健司2025「上総(東京湾東岸地域)の基準資料」『東北南部から近畿における古墳出現前後の土器編年基準資料』日本考古学協会新潟大会。
- 白井克也1996「須恵器甕のタタキ出し丸底技法と在来土器伝統-福岡市・比恵遺跡群第51次調査成果からみた工房の風景」『古文化談叢』第36集 九州古文化研究会。
- 鈴木敏則2025「考古学資料から移動・移住を読む-弥生時代後期における三河・遠江からの土器移動と移住」第3回セミナー資料
- 武末純一2013「タタキ技法はいつまでさかのぼるか-弥生早・前期の甕を中心に-」『弥生研究の群像』
- 武末純一2016「タタキ技法東へ、西へ」『考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集 上』
- 武末純一2019「近畿の前期弥生土器のタタキ面」『橋本博文先生退職記念論集』
- 都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係-淀川水系を中心に」『考古学研究』80
- 野口行雄1988「木更津市蓮華寺遺跡」財団法人君津都市文化財センター
- 米田文孝1982「弥生後期甕から布留甕へ-製作技法の変遷を中心として」『ヒストリア』第95号 1~19頁
- 松本 勝1994「木更津市蓮華寺遺跡Ⅱ」財団法人君津都市文化財センター
- 村松道博他2000「雀居遺跡5」福岡市教育委員会